

立山黒部ジオパークの実情と問題点

王生 透、山瀬 裕子、上田 昇、飯田 肇、今井 喜義、今堀 喜一（立山黒部ジオパーク協会）

富山県東部地域は、3,000m級の飛騨山脈が鎮座し、そこから流れ出る幾筋もの急流河川と扇状地地形が連なり、富山湾は水深1,000mを超える深海湾となっている。大地には、38億年の地球の歴史が刻まれ、大陸衝突や海底拡大、造山運動、火山、地震など様々な地球活動の証拠を見ることができる。

立山黒部ジオパークは、山・川・海をキーワードに、富山県東部（富山市、舟橋村、立山町、滑川市、上市町、魚津市、黒部市、入善町、朝日町）および神通海脚や海底の扇状地地形、宮崎海底断層、1,000mの深海底を含む海域をエリアとしている。富山では呉羽丘陵を境に東部地域を「呉東」と呼び地域性や生活文化が共通していることから、本エリアは地形・文化的にまとまった地域といえる。

山岳地帯は、中部山岳国立公園、県定公園に指定されており、江戸期に起源を持つ山岳ガイドや室堂平・弥陀ヶ原・樺平などで自然解説を行うナチュラルリストが活躍している。自然系を取り扱う博物館が多くあり、富山地学会などの地域研究団体による研究が盛んな地域でもある。併せて、エリア内の多くの企業は、本業を活かした社会貢献を行なっている。

このような中で、住民、研究者、経済人、教育者、自然活動者、ガイドなどが主体となり、2014年に日本ジオパークに認定された。現在、個人、法人会員からなる一般社団法人立山黒部ジオパーク協会（会長 中尾哲雄）が立山黒部ジオパークを運営しており、富山県及びエリア内市町村が支援する体制としている。

域内人口は62万人で、そのうち2/3が富山市に集中しており、多くの住民は平野部に居住している。どこから見ても、高く聳える立山連峰を見ることができるが、当たり前の景観となっており、立山黒部の自然に興味を持つ方は相対的に少ない。

そこで、令和4年4月、富山市中心街の富山キラリにおいて写真展を開催した。富山キラリは、富山市図書館や美術館なども併設している文化施設で多くの市民が訪れる。今回の写真展は、富山県自然保護協会と共同で開催したもので、立山黒部の絶景写真を入り口に、それらを守り伝える活動を紹介しながら、立山黒部ジオパークの特徴や生活する平野と立山連峰とのつながりを実感していただく機会となった。

また地域資源から地球の歴史を知り、今の暮らしや地球の未来を考える機会としてジオツーリズムによる持続可能な観光振興や地域振興を行っている。このキーパーソンはジオガイドである。

山岳部にはジオサイトなど関連サイトが多いことから、平野部をガイドできるジオサイトに加え、2021年より山岳ジオガイドの認定制度をスタートさせた。これに合わせて、山岳ジオガイドを共に安全安心の山岳ジオツアーも実施している。国内では飛騨山脈にのみ現存している氷河を体験するツアーでは、直接氷河を見て体験するだけでなく、氷河を生み出した環境やその未来を考える内容としている。

このように、山岳地帯と平野部、海岸部が繋がる立山黒部ジオパークを、「高低差4,000mロマン」「地球の中の、富山に行こう」とのキャッチフレーズで活動している。